そうもうくっき

草莽崛起

時代を創る「志士」たちへの手紙

目次

はじめに 4
第1章　統合哲学 14
永遠の哲学：世界は大いなる連鎖 22
意識状態：今ここに潜む無限の自由へ 24
新しい永遠の哲学：進化するスピリット 29
発達段階：「器」そのものが書き換わる道 35
四象限：変革はどこから？ 51
今起こりつつある変動 58
第2章　魂を見るための顕微鏡 79
「魂」の民主化 82
ヨガとは何か 86
志士たちに贈る「魂のヨガ」 89
1、ヨガを「伸び縮み可能にする」 93

2、ヨガの「密教」を取り入れる 96
3、ヨガを「魂の瞑想」に接続する 107
4、ヨガを「統合哲学」に接続する 119
第3章　地上世界の天国化 159
つながって、それで？ 163
「源」からの声を出す 167
「あり方」と「やり方」を一致させる 175
土地との協働 180
天地人の「民主主義」 184
「萃点（すいてん）」の思想 188
凸凹の使命 197
魂の時代の「身体」 200
魂の時代の「知性」 204
第4章　過渡期の哲学 211

自然、生命、エコロジー ―― 214
暮らしを立て直す ―― 230
働くこと、お金、資本主義 ―― 244
資本主義を乗り越える道があるとしたら ―― 251
「悪者」から「私たち」へ ―― 259
宇宙に刻み込む「轍（わだち）」 ―― 266
勇気の哲学 ―― 272

はじめに

新しい時代を、自らの生き方を通して創り出していく。そんな同志を増やしたくて、僕はこんな文章を書いています。その頭数は、多い方がいい。不確かな道であっても、歩む者が増えれば、それが道になっていくからです。

僕が妻と共に主宰している小さな私塾「**MYoga の里（みょうがのさと）**」には、たくさんの若者が集ってきます。その多くが、定職に就いていなかったり、旅をしていたり、就職を迷っていたり、働いているけど辞めようと思っていたりする人たちです。

彼らに共通することは、「**社会全体への漠然とした違和感**」あるいは「**はっきりとした危機感**」を抱えていることです。

例えば、農家で3年間研修をした若者は、こう言います。「食べ物をつくるのは大事だけど、資本主義の中の産業としての農業はもう限界だ」。例えば、やっとの思いで医学部を卒業し、病院で研修中の若い医師が、こう言います。「今の病院は、症状を見ているだけで人を見ていない」。例えば、これから就職する企業の「内定者の集まり」に出席した大学4年生が、こんなことを言います。「誰とも話が合わなかった。就職する前から辞めそうな気がしている」・・・

ここにいるのは、無名の若者たちです。まだ何者でもない。若いエネルギーと、何かをしなくてはという意欲と、その熱い想いを表現できる場がないことへの静かな絶望が、ここにはあります。

かつて、亡国の危機に瀕して、吉田松陰は言いました。

「草むらの中に隠れているような無名の志士たちよ、立ち上がれ」

それが本書のタイトル、**「草莽崛起（そうもうくっき）」**の意味です。

みんな、うすうす（あるいははっきりと）気づいているでしょう。自分たちでやらなきゃならないことに。

例えば、政治を政治家任せにしていられない、教育を学校任せにしていられない、健康を病院任せにしていられない、暮らしを行政任せにしていられない、何より、「何を良しとするか」「どう生きていくか」の指針を、他人任せにしているわけにはいかない。

草むらの中に隠れているような無名の志士たちが、全国的に、いや全世界的に、同時多発的に出現してきている。そんな興味深い時代を僕らは生きています。

一度社会に出て、それなりに仕事を経験し、キャリアを積んでから「違和感」を抱き始めた人たちならともかく、社会人になりたて、もしくは学生のうちからこの「違和感」を抱き始めた人は、多くの場合行き場がありません。このような人たちは、まだ社会の中で仕事をして収入を得たり、仕事の中で自らの影響力を発揮して業界全体に働きかけていくような力をまだ持っていないことが多いです。

かといって、明らかに違和感がある「社会」に飛び込んで行って、いつ終わるかもわからない「古びたゲーム」を今から学ぶ気にもなれない。こんなジレンマの中にいると思います。だからこそ、燃えるような想いを隠しながら、草むらの中で息を潜めている。

社会制度や地球環境が危機的であるだけでなく、**「哲学・思想上の貧困」**も目立っています。現代（ポストモダン）に人々の価値観を型取っている哲学は、端的に言って、「ズラしているだけで、深くない」。既存の価値観が絶対的でないことを指摘し、揺さぶり、脱-構築（解体）し、冷笑的になったり、何かへの「アンチ」でいることはできても、自ら積極的に追求するに値する価値を提供することは少ない。極端な平等主義と多様性主義の雰囲気の中で、「信じられるのは私だけ」という自己愛的なナルシシズムと、根本的には「目指すべき善などどこにもない」というニヒリズムが蔓延してい

ます。

僕ら人間は、こんなものなのか？もっと魂を燃やせるような、誇り高い生き方ができないものか？

草むらのなかに隠れている友人たちよ、もっと声を聴かせてください。新しい時代を創っていくには、あなた達の力が必要なんです。

僕自身の個人的な感情を排して客観的に見ても、このような「違和感」を抱ける若者は、優秀で、心優しく、愛に溢れていることが多いです。本来なら、その力、知性、感受性を、豊かな世界を創るために存分に活かしていてよいはずです。その彼らが行き場をなくしていると、どうなるか。社会の中で必要な「働き」や「エネルギー」が足りなくなります。お金（財源）が足りないのが問題なのではない。**物事を動かすのは、いつだって、実際の人の働きであり、エネルギーです。**

優秀で、心優しく、愛に溢れた若者たちのエネルギーが注ぎ込まれないような社会は、間違いなく、より一層ペースを速めて衰退していきます。いたるところで、崩壊の音が聞こえている。

だからこそ、あなたに立ち上がってもらう必要があります。僕たち自身の手で、**僕たち自身が生き**

たくなるような未来を創っていく必要があります。

その時、「誰かのせい」にしているわけにはいかなくなります。ただ「批判」したり、「違和感を表明」したりするだけでは十分ではありません。ただ「アイデアを表明する」だけでも十分ではありません。そして、ただ「愛の意識を持つ」だけでも十分ではありません。

その愛を、どうか、途中で挫けさせることなく、行動に移し、現実化していきましょう。**愛から始まった動機を、愛のまま成就させるには、時に少数者であることを恐れない勇気が必要だし、混乱に巻き込まれない明晰な知性が必要です。**

その時、心優しいだけでは十分ではない。同志たちよ、もっと強く、賢くなろう。僕自身も、そうであろうと思います。愛を支えるために、もっと力強い勇気と、もっと明晰な知性を養っていこうと思います。

僕自身も、まだ何者でもありません。

しかし、ススキの草を一本一本刈り集めれば、やがて雨風をしのぐ屋根が出来上がるように、小さな意志が集まれば、大事を成し遂げられることを僕は知っています。

僕自身は、3年ほど前から、築150年を超える茅葺き屋根の古民家に住み始めました。

大学を卒業し、都内の会社で過ごしているうちに、2-30年後もこのような暮らしや仕事が続けられるとは到底思えなくなり、1年少しでお世話になった会社を離れました。

そこから半年ほど旅をして、「持続可能な暮らし」を営む家族やコミュニティを巡りました。ご縁あった茨城県の奥地で、空き家になった古民家を紹介してもらいました。

朽ちかけた茅葺き屋根、家を飲み込みそうな勢いで生い茂る竹藪、しかしその場を包み込む美しい静寂と鳥の声に魅せられて、「ここに住むしかない！」と思い立ち、移住を決めました。

今から3年前、初めてお会いした古民家の大家さんに、こんなことを言われました。

「俺は学生時代キャッチャーをやってたから、目の前に座った奴が何を考えて、何をやろうとしてるかくらい、目を見ればわかるんだ」

そして、

「あんたは大丈夫だ」

と。そのようにして、古民家への移住を許可していただき、鍵を渡していただきました。

それから、家を片付け、直しながら住み始めました。2年かけてススキを刈り集め、茅葺き屋根の葺き替えを行いました。その過程で少しずつ仲間が増え、今では僕よりずっと逞しい妻と、小さなヤギが一緒に暮らしています。

この本は、この古民家に住みながら、僕が「何を考えて、何をやろうとしているか」についての、現時点での僕の力が及ぶ限りの表現です。

一見別々に見える草たちも、根っこや微生物を介して土中でつながっていることがあるように、きっと僕らも、地下で繋がっている。僕らの同志は、まだまだたくさんいます。ちょっとの改善とかではない、根本的な変革を望み、足下の小さな行動から始めている同志が、きっとたくさんいます。

草むらのなかに隠れているような、小さな愛を胸に秘めた人々が、力強く立ち上がり、繋がり合い、やがて大きな渦をつくり、この世界を「天国のような」場所に変えていく・・・その一助になるために、僕はこの本を書いています。

草むらの中に隠れている志士たちよ、
立ち上がれ!!